甲第 24 号証の1

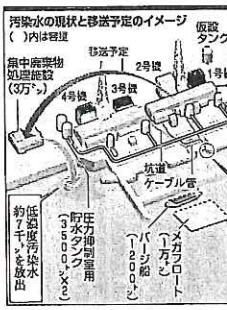
高濃度汚水 流出止まる

福島第一 原発内なお6万トン

③取水口付近にある作業用の穴（ピット）の壁。亀裂から出ていた高濃度の放射能汚染水の流出が止まった＝6日午前5時38分◎ピットの壁の亀裂から海に流れ出ている汚染水＝2日午後0時43分、いずれも東京電力提供

東日本大震災で被災した東京電力福島第一原発2号機の取水口近くで高濃度の放射能汚染水が流出していた問題で、東電は6日朝、工事によって流出が止まったと発表した。ただ、汚染水のたまった建屋や坑道などには地震で多くの亀裂があるとみられ、別の場所から漏れ出る恐れがある。東電は汚染水が外洋に広がるのを抑えるため、1～4号機の取水口付近をカーテン状の布で覆う工事を進内にも始める。

流れ出ていたのは、2号機の原子炉の水を冷やすための海水の取水口近くにある作業用の穴（ピット）。付



放射能汚染水

福島第一原発では2号機のタービン建屋地下や外の坑道に高濃度の放射能汚染水がたまっている。移す場所を確保するため、もっとも汚染度の低い水を海へ放流している。東電は「低レベル」と呼んでいる。

近。2日朝、ピットの周囲に亀裂が見つかり、毎時1千ミリシーベルトを超える高濃度の汚染水が海に流れ出ていた。破損した燃料から漏れ出た大量の放射性物質をタービン建屋や外の坑道を伝ってきたとみられる。

当初は、流出ルートが特定できず、水を止める作業が難航した。5日午後3時、地上からヒットの下にある砂利の層まで穴をあけ、砂利をガラス状に固める薬剤を注入する作業を開始。のべ52人の作業員が一晩かけて約1万2千リットル（容量2千～2500トン）を注入したところ、6日午前5時38分に海への流出が止まったのが確認された。

◇

福島第一原発では、1、2、3号機のタービン建屋周辺に高濃度の放射能汚染水があり、作業員が一時退避するなどの対応に追われている。原子炉内への注水や燃料プールへの放水作業などで増える可能性もある。原子炉を冷却するシステムを復旧させるには、タービン建屋内での作業が欠かせないが、現状では放射線が高すぎて、作業が難しい。東京電力は、水の「主戦場」を建屋や坑道から別の場所に移す計画を進めている。ただ高濃度の汚染水は敷地内で管理し続ける必要がある。

タービン建屋の汚染水は最終的には建屋内にある復水器という設備に入れる予定だ。1～3号機あわせて7500トン。ただ、すでにその大半が入っているため、別の水を入れるスペースが必要である。

移す先は各号機の建屋の横にある復水貯蔵タンク（容量2千～2500トン）。すでにこのタンクにあった水を圧力抑制室貯水タンク（容量7千トン）に移し替える作業は終わった。現在は、復水器の水を復水貯蔵タンクに移す作業が進められている。

敷地内には廃水を処理する集中廃棄物処理施設（容量7万トン）があり、ここにも汚染水はためられる。

このほか仮設タンクを設置して合計2万トン弱の容量を5月までに確保する予定。また、静岡市から提供された大型浮体式構造物（メガフロート）に1万トン、米軍が提供する台船（バージ船）に1隻あたり千～1200トンを収容可能だ。

低濃度分放出 総量は8500トンに

比較的汚染度の低い水の海への放出が6日午前6時半ごろから始まった。放出は高濃度の放射能汚染水を保管する場所の確保や、設備の falls防止のために、4日夜から始まっていた。放出は当初予定より少ない7千トンだった。この ほか、5、6号機周辺にたまり水、集中廃棄物処理施設からの放水は6日午前6時半に放出を終了した。放出量は当初見込んだ1万トンより